

古文散文教材の活字表記のあり方について

著者	福田 孝
雑誌名	武蔵野大学日本文学研究所紀要
号	1
ページ	94-103
発行年	2014-03-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000491/

古文散文教材の活字表記のあり方について

福田 孝

1 はじめに

近年、高等学校の現場において古文の人気は低い。平成十九年七月に国立教育政策研究所教育課程研究センターより公表された、高等学校の「平成一七年度教育課程実施状況調査」内における、「古文は好きだ」の項目において、「どちらかといえばそう思わない」21・5%・「そう思わない」51・2%で、古文を好きと思っていない高校生は72・7%に上り、調査された教科科目の中でもっとも嫌われている。ベネッセコーポレーションが経済産業省の委託を受けて平成十七（二〇〇五）年に大学生一〜四年生に実施した「進路選択に関する振り返り調査」内での、高校時代の好き嫌いの教科・科目についての結果では、「古典（含漢文）」では、「やや嫌いだった」「とても嫌いだった」の計が57・6%と、（含漢文）であり数値は異なるものの、やはり「嫌い」が占める割合が全科目内で一番高い。

古文の文章に親しまないうちに古典文法を詰め込むことが原因の一つと考えられる。また、古文の学習に消極的な高校生が

らは「なぜ学習しなければならないか分からない」「日本語とは思えない」といった感想が聞かれる。前者の感想については別途考えたいが、後者の感想については、古文教材の活字本文のあり方が古文学習に抵抗感を持たせているように思う。古文の文章の特質を踏まえたうえで学習者にどのような活字本文を提供するのが適切かへの配慮はほとんどなされてこなかったように思う。本論では、古典作品の写本の書記の様子・古文の文章の特性について確認し、その上で古文に不案内な学習者にとって読みやすい古文散文教材の活字本文を作成するための方向性を提示したい。

2 活字化になじまない古文の書記

入門期教材として有名な「児の空寝」の教科書本文を示してみよう。

今は昔、比叡ひえの山やまに児ちごありけり。僧そうたち、宵よるのつれづれに、「いざ、かいもちひせん。」と言ひけるを、この児、心

よせに聞きけり。さりとして、し出ださんを待ちて寝ざらんも、わるかりなと思ひて、片方かたがたに寄りて、寝たるよしにて、出で来るを待ちけるに、すでにし出だしたるさまにて、ひしめき合ひたり。

この兎、さだめておどろかさんずらんと、待ちぬたるに、僧の、「もの申し候はん。おどろかせたまへ。」と言ふを、うれしとは思へども、ただ一度にいらへんも、待ちけるかともぞ思ふとて、いま一声呼ばれていらへんと、念じて寝たるほどに、「や、な起こしたてまつりそ。をさなき人は、寝入りたまひにけり。」と言ふ声のしければ、あな、わびしと思ひて、いま一度起こせかしと、思ひ寝に聞けば、ひしひしと、ただ食ひに食ふ音のしければ、ずちなくて、無期ののちに、「えい。」といらへたりければ、僧たち笑ふこと限りなし。(第一学習社「新編国語総合」国総328)

問題は二つある。

一つは和語を中心にして書かれることの多い和文を活字化するにあたり、なるべく漢字を宛てず平仮名で活字化しようとするため、語の認識ができにくくなってしまふことである。たとえば、「かいもちひせん」という箇所は、古文を読み慣れた人間にとっては語の認識は苦勞しないものだが、初めて接する者にとつては「かい」「もちひ」「せん」なのか「かいも」「ちひせん」なのか「かいもち」「ひせん」なのか、といったことが認識できない。高校一年生の教科書からは他にも「いとけなき

ときより」「くちをしくおぼえて」「いとうつくしうてゐたり」「いかでかいまする」「かくしつつまうでつかまつりけるを」といった例を挙げるができる。

もう一つは、文意の大きな流れを理解するための配慮がなされていないということである。「僧たち、宵のつれづれに、「いざ、かいもちひせん。」と言ひけるを、この兎、心よせに聞きけり。」の部分であれば、「僧たち」が「言ひける」を、「この兎」が「聞いた」という大きな文脈が、四箇所読点が打たれているために見失われる。あるいは、第二段落は一文から成っている。現在の読点の打ち方では多くの学習者は文意の大きな流れを認識せず一文から成っていることに気付かないまま学習を終えることになつてしまつてゐる。

こうした活字化の問題は、草仮名(変体仮名)による写本のもともとの表記のあり方が活字化になじまないにも関わらずそのことに留意されていないことから生じているものと考えられる。草仮名を主体として書かれる古典作品の写本においての、語句の切れ目を示すためになされている工夫の現象面については、かつて春日政治が言及し、近年では小松英雄がその現象面と原理について言及している。小松は、「音仮名によつて日本語を表記すると、語句の切れ目が見分けにくくなつてしまふ」欠陥があり、その欠陥を克服して効率的な読み取りを可能にするため、草仮名を用いた仮名文においては「語句の分かち書きが選択されている。ただし、分かち書きといつても、アルファベットのようにはスペースを空ける方式ではなく、墨継ぎと連綿とに

よる分がち書きである。」と述べる。すなわち、表音文字ばかりを羅列したのでは読み手に語を認識させるのに効率的ではないため、「語の綴り」すなわち「連綿」が発達し、結果として「分かち書き」が用いられたという。また大きな意味の区切りにあたる箇所で「墨継ぎ」がなされて効率的な読解が可能となるような工夫もなされているという。例示した「兎の空寝」について、底本として使用されることの多い宮内庁書陵部蔵の御所本宇治拾遺物語の複製では、「僧たち」「よひの」「つれ／＼に」「いさ」「かいもちひ」「せんと」「いひける」といった具合に一つ一つが連綿で示され、「僧たちよひの」「此兎心よせに」と傍点のところで墨継ぎがなされていると見える。

以上のようなことからすると、「連綿」「分かち書き」や「墨継ぎ」を用いて書かれた草仮名の仮名文を、現代日本語の標準的な活字本文に等価に置き直すことが容易でないことが分かる。もし相当するものを見出そうとするならば、「連綿」「分かち書き」に該当するものが漢字仮名交じりであろうか。漢字は概念を表す語（いわゆる自立語）に使われることが多く、仮名、とくに平仮名は補助的な部分（いわゆる付属語）に使われるという傾向がある。漢字と平仮名とは見た目が異なるためである。英語やフランス語でなされている分かち書きの効用は、現代日本語においては漢字仮名交じり文が果たしている。また、墨継ぎに該当するものは句読点であろうか。

仮名文の活字化に際しては、表記の原理が異なるため等価な置き換えができないことを承知したうえで現代日本語の活字に

おける書記の様相に従いながら読みやすくしてやる方向を探っていかななくてはならないように思われる。

3 だらだらと書き連ねられる文

小松は書記に関する前節の分析から以下の考えを導き出している。和文の文体基調は口頭言語であるため句節と句節との相互関係が緊密でなく、隣接した句節と句節とが「付かず離れず」の関係であり、句読点で文の構造を明晰に示さず、全体が柔構造になっていいるところに和文の表現としての特徴がある、という。小松はこれを「連接構文」と名付けている。

同様に、福島直恭は、今日の我々が規範と認識している、書記言語「現代標準日本語」と、平安時代の和文とが、いかに異なる性格を持つものかを論じている。和文においては接続詞の出現頻度が非常に低く、文と文との論理的な関係を積極的に表示しようとはしない、すなわち理解のための手がかりをたくさん提示しないというタイプの書き方がされているという。また、連用的な従属節が多く、一つの文がなかなか切れずに続いて解釈にあたっての負担が大きく、発信者と受信者との間で状況や知識を多く共有していることを前提とした文となっているという。以上から、平安和文は、口頭言語的な特徴を持ち、ゆえに文という単位自体が平安和文においては曖昧であり、切れずに連続的につながっていく性格を持つと述べている。

こうした和文の様相を、夙に谷崎潤一郎は「文章読本」の中で、流麗な調子の「源氏物語派」の文章と呼び、「一つのセン

テンスから次のセンテンスへ移るのにも、境界をぼかすようにして、どこで前のセンテンスが終り、どこで後のが始まるのか、はじめをわからなくする」と言い、「源氏物語」「須磨」巻のなかの、「かの須磨は、昔こそ人のすみかなどもありけれ」から「悲しきことさまぐなり」までを例として挙げて、「思し乱る。」の次に始まる「よろづの事云々」のセンテンスも、独立しているが如くであつて、気分の上ではやはり前に繋がっている。かくしてこの四行の文章は、三つのセンテンスから成り立つているとも云えるし、全部が一つのセンテンスであるとも云える」と言う。そうしてまた別に「つなぎ目の分らないセンテンスを幾つもつなげて行くことは、結局非常に長いセンテンスを書くことになりませう」とも言っている。

例として『大鏡』の挿話をあげてみる。

いとをかしうあはれにはべりしことは、この天曆の御時に、清涼殿の御前の梅の木（せいりやうでんのごまへめのうめのみ）の枯れたりしかば、求めさせたまひしに、なにがしぬしの藏人（くらうど）にいますがりし時、うけたまはりて、「若き者どもは見え知らじ。きむち求めよ」とのたまひしかば、一京まかり歩きしかども、はべらざりしに、西京（さいけい）のそこそこなる家に、色濃（いろこ）く咲きたる木の、様体（ようたい）うつくしきがはべりしを、掘り取りしかば、家あるじの、「木にこれ結（むす）ひつけて持（も）てまゐれ」と言はせたまひしかば、あるやうこそはとて、持てまゐりてさぶらひしを、「なにぞ」と御覽（ごらん）じければ、女の手にて書きてはべりける。

勅（ちく）なればいともかしこしうぐひすの

宿（しゆく）はと問はばいかか答へむ

とありけるに、あやししく思（おも）し召（め）して、「何者の家ぞ」とたづねさせたまひければ、貫之（つらゆき）のぬしの御女（ごめ）の住む所なりけり。「遺恨（ゐごん）のわざもしたりけるかな」とて、あまえおはしましける。重木（しげき）、今生（このいま）の辱号（せうごう）は、これやはべりけむ。さるは、「思ふやうなる木持（こも）てまゐりたり」とて、衣（い）かづけられたりしも、辛（から）くなりなき。

（小学館 新編日本古典文学全集本に拠る）

夏山繁樹が貫之娘宅の梅の木を不用意に掘り取つてきてしまふ『大鏡』の挿話である。地の文で最初に句点が施されたところまで二四〇字くらい（含句読点・会話文）である。『大鏡』では他にも、安子の芳子への嫉妬を述べる挿話では、挿話自体が一文と見なせ、七六〇字くらい（含句読点・会話文）から成っているし、兼通と兼家の兄弟喧嘩の挿話では最初に句点を施されるどころまでが六五〇字くらい（含句読点・会話文）である。『源氏物語』の中で、会話文や心内語をほとんど含まず一番長い一文と見なせるのは「松風」巻の、都に出立しようとしている娘に向けて明石入道が述べる述懐内の「世の中を捨てはじめしに」に始まる一文である。注釈書によつて漢字の宛て方が異なるので一概には言えないが、句読点を含めて六四〇字くらいである（新潮日本古典文学集成本に拠る）。こうしたことは書き手手の文体ということではなさそうであり、だからと書き続けるというのが古文の文章の一つの特徴と言えそうである。「御

局は桐壺なり」といった短い文もありはするが、だからだと長く書き連ねる文が多い。文という単位自体が曖昧であることと長くだからだと書き連ねて一文を書き出すということとは関連するように思われる。

平安和文は口頭言語的性格を持ち、それゆえに今日の我々が観念的に「文」として想定しているようには、かっちりとした切れ目を持たない。これを活字に置き直すには十分な配慮が必要である。

4 活字化にさいして

佐伯梅友は、前節で言及した『源氏物語』『松風』巻の、長い一文を、大きく①から⑤まで五つの部分に分けて分析している。まず、五つの部分を、改行で見やすく十三の部分に分ける。そして、「こういう長い文を読む時には、ここでやっているように、ある一まとまりを考えて、それを繋いでいくのが、文脈をはつきりみるのに手っ取り早い方法だろう、と考えて試みたわけである。」と述べる。長い文を読解するには文の中のまとまりを把握することが重要であるというのである。そして、佐伯が分けた十三のそれぞれの末尾は、「…思ひたまへ立ちしかど」「…事多かりしかば」「…人にも知られにしを」「…思ひはべるに」「…嘆き渡りはべりしままに」「…頼みはべりしに」「…見たてまつり初めても」「…悲しう嘆きはべりつれど」「…御宿世の頼もしさに」「…ことに覚えたまへば」「…静めがたけれど」「…光著ければ」「…今日ながく別れたてまつりぬ。」で

ある。「…嘆き渡りはべりしままに」「…見たてまつり初めても」「…御宿世の頼もしさに」と三箇所単純に接続助詞と言えない言い方がありはするが、その他は「ど」「ば」「を」「に」の接続助詞で分けられている。最終的に五つの部分に分けるにあたっては「…思ひたまへ立ちしかど」「…事多かりしかば」「…人にも知られにしを」「…悲しう嘆きはべりつれど」と、接続助詞だけが残る。だからだと書き連ねられる文は接続助詞を用いて謂わゆる「節」と呼ばれる大きなまとまりを連ねていくことで出来上がっていることが多く、そうしたらだと長く続く和文の文意を大きく切つて理解するさい接続助詞がその指標となる可能性が高いことが示されている。

近藤泰弘が『日本語記述文法の理論』のなかで古文の接続助詞を分類している。南不二男が現代日本語の接続助詞を分類したのに倣ったものである。近藤の分類は厳密な検討を経たものではないが、目安として参考にできるものである。

A類 て(様態)・つつ・ながら・で(否定)・連用形

B類 とも・ば(仮定)・は(仮定)・ば(確定)・ども・ど・もの・ものから・ものゆゑ(に)

C類 を・に・(が)

どのような述部を受けるかによって分類されるものであるが、南の言葉を借りれば、「A類のものは、他のA、またはB、Cの句の一部になることができる」「B類のものは、他のB、あるいはCの句の一部になることができる。しかし、A類の一部になることはできない」「C類のものは他のCの句の一部にな

ることができる。しかし、A、Bの句の一部になることはできない」という関係がある（通常「節」と呼ばれているものを、南は従属句あるいは句と呼ぶ）。単純にいえばA類・B類・C類となる。そして、A類のものは多くの場合、主節の構文に拘束され、独立し得ないと考えられるので、A類の接続助詞で大きなまとまりが示されることはあまりないと考えられる（しかし、例えば「て」はその前後で主語が変わる場合があり、そうした場合には別に考えることになろう）。そうすると、B類・C類で示されている接続助詞が大きなまとまりを考えようとするさいの目安となり得る。とくにC類は、特定の条件構成力を持たないため、前後の論理的接続関係を決定するというより、繋げるだけの接続助詞であり、だからだと内容をつなげていくさい頻用されるものである。「……ところ」と訳せるような「ば（確定）」も近い働きをすと思われる。したがって多くの場合、接続助詞の中でも「に」「を」「ば」で区切ることが、長い一文を幾つかのまとまりとして考えていくさいの目安となると思われる。

ここまで述べてきたことに従って、先に例示した「兎の空寝」の文章を本稿なりに活字化したものを示してみる。

今は昔 比叡の山に兎ありけり。僧たち宵のつれづれに「いざ搔餅せむ」と言ひけるを、この兎心寄せに聞きけり。「ざりとしてし出ださむを待ちて寝ざらむも悪かりなむ」と思ひて、片方に寄りて寝たる由にて出で来るを待ちけるに、

すでにし出だしたるさまにてひしめき合ひたり。

この兎「定めて驚かさむずらむ」と待ち居たるに、僧の「もの申しさぶらはむ。驚かせたまへ」と言ふを、「嬉し」とは思へども、「ただ一度に答へむも待ちけるかともぞ思ふ」とて「いま一声呼ばれて答へむ」と念じて寝たるほどに、「やな起こしたてまつりそ。幼き人は寝入りたまひにけり」と言ふ声のしければ、「あな侘びし」と思ひて「いま一度起こせかし」と思ひ寝に聞けば、ひしひしとただ食ひに食ふ音のしければ、術なくて無期の後に「えい」と答へたりければ、僧たち笑ふこと限りなし。

読点によって大きなまとまりを示してみようにした。例えば、第二段落は、大きな九つのまとまりが連なつて、やがて大きな一文となつてることが書記のさまから示せるように思われる。

ここで用いた原則を列挙してみる。

・ 大きなまとまり（いわゆる「節」と言われる箇所、もしくは「節」がいくつも積み重なつたうえで接続助詞などで切れてまとまっているところ）を、読点で示す。

・ 語句の識別のために

① 名詞や動詞には出来るかぎり漢字を宛てて漢字仮名交じり文であることの効用を利用する。（但し動詞と区別させるため助動詞や補助動詞には漢字を宛てない）。

②半角スペースを用いる。

③ルビを用いて前後の漢字と一語化しないようにする

(「一声呼ばれて」などのように)。

・会話や心中思惟を示す鍵括弧も学習者の負担を増やさないために出来るだけ付す。

(・推量の助動詞「む」には「ん」でなく「む」を宛てる。「む」と「ん」が同一であることは初学者に学ばせるのは後日
でよい。最初は「む」でしっかりと認識させるほうがよい
と思う)。

参考にするため、二つの試案の文章を掲げる。

大納言殿参りたまひて詩のことなど奏したまふに、例の
夜いたく更けぬれば、御前なる人々一人二人づつ失せて御
屏風・御几帳のうしろなどにみな隠れ臥しぬれば、ただ一
人眠たきを念じて候ふに、「丑四つ」と奏すなり。「明けは
べりぬなり」と独り言つを、大納言殿「今更にな大殿籠
りおはしませ」とて「寝べきもの」とも思いたらぬを、
『うたて何しにさ申しつらむ』と思へど、また人のあらば
こそは紛れも臥さめ。主上の御前の柱に寄り掛からせた
まひて少し眠らせたまふを、「かれ見たてまつらせたまへ。
いまは明けぬるに、斯う大殿籠るべきかは」と申させたま
へば、「げに」など宮の御前にも笑ひきこえさせたまふも
知らせたまはぬほどに、長女が童の鶉を捕へ持て来て

「明朝に里へ持て行かむ」と言ひて隠し置きたりける―い
かがしけむ―犬見つけて追ひければ、廊の間木に逃げ入り
て恐ろしい鳴き喧しるに、皆人起きなどしぬなり。主上も
打ち驚かせたまひて「いかで ありつる鶉ぞ」など訊ねざ
せたまふに、大納言殿の「声 明王の眠を驚かす」といふ
言を高う打ち出だしたまへる めでたうをかしきに、ただ
人の眠たかりつる目もいと大きになりぬ。「いみじき折の
言かな」と主上も宮も興せさせたまふ。なほ斯かる事こそ
めでたけれ。

(新潮日本古典文学集成本『枕草子』に拠る)

或る君達に―忍びて通ふ人やありけむ―いとうつくしき
児さへ出で来にければ、『あはれ』とは思ひきこえながら
―きびしき片つ方やありけむ―絶え間がちにてあるほどに、
思ひも忘れずいみじう慕ふがうつくしうて 時々は或る所
に渡しなどするをも「否」などとも言はでありしを、ほど
へて立ち寄りたりしかば、いと寂しげにて―めづらしくや
思ひけむ―かき撫でつつ見居たりしを、え立ち留まらぬこ
とありて出づるを、馴らひにければ例のいたう慕ふがあ
はれに覚えて暫し立ち止まりて「さらば いざよ」とてか
き抱きて出でけるを、いと心苦しげに見送りにて前なる火取
を手まさぐりにして

こだにかくあくがれ出でば たきものの

ひとりやいとど おもひこがれむ

と忍びやかに言ふを、屏風の後ろにて聞きて、いみじうあはれに覚えければ、児を返してそのままにまむ居られにし。
(岩波書店 新日本古典文学大系 『堤中納言物語』「このついで」に拠る)

接続助詞だけでなく「：ほどに」のあとにも読点を施した。接続助詞以外に「：ほどに」といったものにも文の大きなまとまりをなす働きがあるようである。

そして、『枕草子』の文章の「例の夜いたく更けぬれば」の下に読点を施すか否かは学習者の便宜を考えてその活字本文作成者が判断することになると思う。実際には節と節とは入れ子式になっていくつかが重層的になることがある。その幾つめのレベルに読点を施すのがいいのかは個々の本文の実際に即して適切な対応をするしかないと思うからである。

以上のような活字化の原則を施しても、十全に活字に置き直すことができないところは残る。

小松は「作者の脳裡にそのような句切れの意識がなかったたのであるから、句読点を明確にして読もうとすること自体が読み方として誤りである。引用符を加えることにも同様の問題がある」と言っている。例えば、打消の助動詞「ず」が文中にあつた場合、その下に句点を打つか読点を打つかは現代の校訂者の判断にまかされている。前後の文脈からして大きく切れていると認識される場合には句点が、連続していると認識される場合は読点が打たれる。あるいは、「こそ……用言の已然形」の言い方

が文中にあつた場合も、逆接のニュアンスで下に大きく係っていくと認識される場合には読点が打たれるし、文として大きく切れていると認識される場合には句点が施されることになる。もとの写本においては墨継ぎによって切れ目がおよそ示されているだけであつて、現代語の句読点のどちらに該当するかは明示されていない。そこには校訂者の判断によって句点か読点が施されているということである。

次のような事例もある。

『大鏡』の梅の木の話の冒頭「いとをかしうあはれにはべりしことは」は挿話全体に係っていく。挿話内のすべての文に関わるのである。同じ『大鏡』の花山院出家の挿話は「あはれなることは」で始まる。注釈書の類が句点で九つの「文」に分ける、その九文すべてに関わる。兼通臨終にさいしての、兼通と兼家の兄弟喧嘩の挿話は「おのれが祖父親はかの殿の年頃の者にてはべりしかば、こまかにうけたまはりしは」で始まり、やはりこの語句は句点が施される後読する五つの文すべてに係っている。こうした「いとをかしうあはれにはべりしことは」といった表現は文を越えて挿話全体に係っていつているわけであつて、現代日本語において文と文とは句点で明晰に区切らなければならぬとするのとは異なる書記意識ゆえになされる書き方である。

あるいは、『枕草子』「長月ばかり」の章段は、「すこし日闌けぬれば、萩などのいと重げなるに、露の落つるに枝うち動き、人も手触れぬに、ふと上ぎまへあがりたるも、「いみじう

をかし」と言ひたる言^{ことば}どもの、「人の心には、露をかしからじ」と思ふこそ、またをかしけれ」のように活字化されている（新潮日本古典文学集成本）。句読点や鍵括弧を付した時点で、この文章のおもしろみは半減してしまふ。「いみじうをかし」で一端切れると思つたのが、「と言ひたる言^{ことば}ども」と作者の自己反省に移っていくところにこの文章の妙味があるからである。また、鍵括弧を付そうとしてもじつは心中思惟や会話文が地の文とつながっていく場合もありはするし、「はさみ込み」をどのような補助記号を用いて示すのがいかなど、留意すべき様々な問題があることも確かである。

5 まとめとして

草仮名を主として筆で書かれた古典作品の写本の書記の様相を、活字による現代標準日本語の書記の様相に等価に置き直すことは困難である。そのことを認識しつつ、古文の文章の特性を踏まえたいうえで、学習者に古文への抵抗感を感じさせない、読みやすい活字本文を作る配慮をなす必要があると本稿では考へている。

なかでも読点は本稿が一番留意したいことである。現代標準日本語の書記のあり方からすれば、たいへん長いと見える「文」で書き綴られている場合が古文では多い。にも関わらず、語句と語句との小さな区切り目を示すための読点が用いられることが今までは多く、そのために長い一文をなしている大きなまとまりを示すための読点との区別が出来なくなり、学習者は小事

にわずらわされて大きな文脈を見失つて読解に苦勞することが多くなつていたと思われる。語句と語句とを区切るための読点は用いず、文の中の大きなまとまりを示すためにのみ読点を用いる、という大きな方向性を立てることを提示してみた。

ここで扱つた、文の中の大きなまとまりを示すために読点を用いるということは、本多勝一が『日本語の作文技術』のなかで「重要でないテンはうつべきでない」「テンというものの基本的な意味は、思想の最小単位を示すもの」といった指摘とも関わるものように思う。

古文教育においては、どのような作品を教材として扱うかという問題も大きな問題であるが、学習者に嫌われないように作品を提示する書記のあり方も配慮したほうがよい問題であると思ふのである。

(1) このことについては全国大学国語教育学会 第14回弘前大会にて「古典文法の指導を考え直す―佐伯梅友に倣いつつ―」と題して発表した（二〇一三年五月）。

(2) 和語を中心として書かれていることを一度は意識させる必要があることについては「古文教育の側面と古文本文の表記の仕方について」「武蔵野文学館紀要 第3号」二〇一三年三月にて言及した。

(3) 『春日政治著作集2 国語文体発達史序説』勉誠社 一九八三年一月（一七六頁～一九〇頁）、この著作は一九四五年三月に執筆されたもの時勢のために発刊されないままであった。

- (4) 小松英雄「Ⅱ-4 日本語の歴史 書記」『言語学大辞典 世界言語編 第二卷』三省堂 一九八九年九月、『仮名文の構文原理』笠間書院 一九九七年二月…増補版二〇〇三年…新装版二〇一二年、『日本語書記史原論』笠間書院 一九九八年六月…増補版二〇〇〇年…補訂版二〇〇六年)
- (5) ただし、連綿や分かち書きや墨継ぎは規範意識を持つてなされてきたわけではないので、厳格にその書き方がなされているわけではない。例えば、筆に含ませた墨が不足し、句節が切れる手前で墨継ぎが施されていると思われる場合がある。また、あくまでも当該の写本を書き写した人物の解釈が反映しているものとみなすべきもので、原作者による読解の方向が指し示されているわけではない。
- (6) 中田祝夫「日本の漢字(日本語の世界4)」中央公論社 一九八二年六月
- (7) 福島直恭『書記言語としての「日本語」の誕生―その存在を問う―』笠間書院 二〇〇八年十一月
- (8) 谷崎潤一郎『文章読本』中央公論社 一九三四年十一月(本文は中公文庫版に拠った)
- (9) 佐伯梅友「松風の巻の別離の場面」『古文読解のための文法下』三省堂 一九八八年二月
- (10) 南不二男『現代日本語文法の輪郭』大修館書店 一九九三年七月
- (11) 近藤泰弘『日本語記述文法の理論』ひつじ書房 二〇〇〇年二月
- (12) 本多勝一『日本語の作文技術』朝日新聞社 一九七六年七月